

ウェブ教材『CALL ドイツ語』を利用したドイツ語授業

Kasjan, Andreas

Department of Linguistic Environment, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University :
Associate Professor : Language Education

<https://doi.org/10.15017/21801>

出版情報：言語文化論究. 28, pp.105-120, 2012-03-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



ウェブ教材『CALL ドイツ語』を利用した ドイツ語授業

Andreas Kasjan

九州大学大学院言語文化研究院 言語文化論究 第28号 平成24年2月発行 抜刷

Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
Motooka, Fukuoka, Japan

STUDIES IN LANGUAGES AND CULTURES, No.28, February 2012

ウェブ教材『CALL ドイツ語』を利用したドイツ語授業

Andreas Kasjan

1. はじめに

本稿では、ドイツ語教材『CALL ドイツ語』（阿部；岡野；カスヤン；杉浦 2006）のビデオスキット部分（Kasjan 2007 も参照）に重点を置いてこの教材を紹介した上、『CALL ドイツ語』を利用した会話中心の授業について報告したい。

2. 教材『CALL ドイツ語』の趣旨

『CALL ドイツ語』は、学習者にドイツ語の初級文法を理解させるだけでなく、ドイツ語の基本的な表現パターンに関する応用能力を習得させることも目指して、図1のように文法の部分とビデオスキットの部分から構成されている。



図1 CALL ドイツ語のトップページ

文法の部分は、図1のように18課からなり、初級ドイツ語用の文法事項が扱われる。文法の部分に関する詳細な説明は省き、ビデオスキットについて述べる。

3. ビデオスキットについて

ビデオスキットの部分は16課からなり、各課はスキット、説明、応用練習の3つの部分（図2）に分かれている。スキットは全てフラッシュ・ムービーになっている。スキットの内容は、暗記しやすくロールプレイのために利用できる対話文形式である。各スキットの右上には、その課の「キーセンテンス」とその和訳が表示され、左側には、文法の部分とビデオスキットの目次であるサイド

メニュー（図2）が設けられている。ビデオスキットとその「説明」および「応用練習」へは、図2のように、まずサイドメニューの一番下にある「ビデオスキット」をクリックし、ビデオスキットのポップアップ・ウィンドウを開いて、見たい項目をクリックすることでアクセスできる。



図2 ビデオスキットとサイドメニュー

3.1 ビデオスキットの構造

各スキットには、以下の図3～図6のように4つのステップが設けられている。「Step 1 聞く」では、台詞の文章は表示されず、スキットを見ながら音声聞く。「Step 2 理解する」では、ドイツ語テキストとその和訳が対照表示され、Step1に加えてスキットの台詞を読み、理解する。「Step 3 練習する」では、スキットの1つの役を選択したうえ、ロールプレイ形式で対話練習する。「Step 4 確認する」では、台詞の和訳のみが表示されるので、ドイツ語が正しく聞き取れ、ドイツ語の台詞を覚えているかを確認する。



図3 ビデオ1のStep 1



図4 ビデオ1のStep 2



図5 ビデオ1のStep 3



図6 ビデオ1のStep 4

スキットを再生すると、画面が台詞の内容に合わせて変化し、ドイツ語の音声进行を聞くことができる。再生中の表現は図7のように、黄色でハイライトされる。

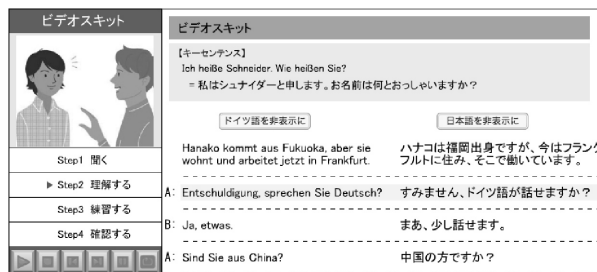


図7 再生中のビデオスキット

それぞれの台詞の間に4～5秒の間隔がある。録音は複数のドイツ語母語話者によるものとして計画されたが、コストの問題で、録音は全て筆者によるものになった。将来的には、複数の母語話者の声で収録し直すことが望ましい。録音の速度は通常より遅く、初学者に適したものになっている。

上に説明したように、「Step 2 理解する」では、ドイツ語の台詞と日本語による意識が対照表示されているが、和訳だけでは物足りないと感じる学習者のために、「説明」のページが別に設けられている。「説明」のトップには、図8のように、まずキーセンテンスとその和訳および、そのスキットに出てくる文法事項が文法の第何課で扱われているかが示されている。また、キーセンテンスの右側に音声ボタンがあり、それをクリックするとキーセンテンスについての日本語による説明が聞ける。

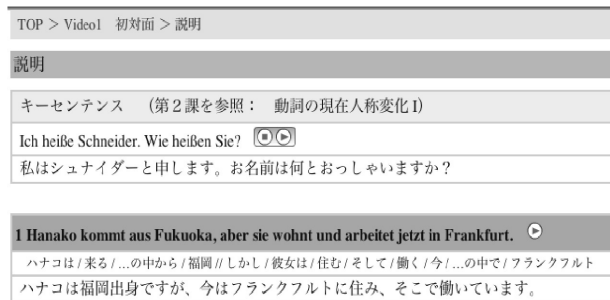


図8 「説明」部分のキーセンテンスと例文の和訳

図8のように、キーセンテンスの下には台詞の表現が一つ一つ表示され、それぞれの表現ごとに、

音声再生ボタンがあり、日本語による逐語訳と意識も表示されている。この2つの訳の役割について説明しよう。

「説明」では、それぞれのスキットで扱われているドイツ語表現について、語法や文法、語順や応用などが詳しく解説されている。「応用練習」では、各課で扱われた重要なパターンや表現について3択形式の問題10問が設けられている。

あるドイツ語の表現をどんな場合に応用できるかを学習者に教えるためには、その表現にあたる日本語の意識が不可欠であるが、学習者にその表現の構造を理解させるためには、更なる説明が必要になることもある。逐語訳には確かに欠点（Butzkamm 1993, 214 u. 257）があるものの、逐語訳によって、一つ一つの単語の意味だけでなく、語順なども理解できる。図8と図9のように、逐語訳では、語と語の間に「/」を入れ、ドイツ語のコンマにあたる印は「//」で、ピリオドにあたる印は「///」である。前置詞に対応する逐語訳の前には「…」をつける。逐語訳においては、冠詞や未来・完了形の助動詞などのような語は、翻訳せず、(…)の中に（不定冠詞）や（未来の助動詞）のように説明される。

「説明」では、図9のように和訳以外に、「ポイント」、「語順」、「応用」に分けた解説もあり、「ポイント」では、その課で扱われている文法が説明されている。「語順」では、学習者に解りにくい語順、例えば主語が動詞の後に来る場合や副文の語順等々が説明されている。「応用」では、その表現の入れ替え・拡大およびまだ扱われていない、またはすでに学習済みの文法事項の説明があるが、応用で使用されている語彙は、原則としてこれまでのビデオスキットで習ったものに限られている。

1 Hanako kommt aus Fukuoka, aber sie wohnt und arbeitet jetzt in Frankfurt. 	
ハナコは / 来る / ...の中から / 福岡 // しかし / 彼女は / 住む / そして / 働く / 今 / ...の中で / フランクフルト	
ハナコは福岡出身ですが、今はフランクフルトに住み、そこで働いています。	
ポイント：	動詞は主語に応じて変化します。 kommt = 動詞 kommen の3人称単数現在形。 主語が、er/sie/es または単数の名詞の時には、動詞の語尾 -en が -t に変わります。 wohnt = 動詞 wohnen の3人称単数現在形。 arbeitet = 動詞 arbeiten の3人称単数現在形。 動詞の語幹が、arbeit- のように t で終わる場合、動詞の語尾が -et になります。
応用：	ドイツ語では、人の出身地を紹介する時には、 „Sie/Er kommt aus ...“ 「彼女/彼は...の出身です」という言い方を使います。 人の住んでいるところまたは仕事場を紹介する時には、 „Sie/Er wohnt in ...“ 「彼女/彼は...に住んでいます」または „Sie/Er arbeitet in ...“ 「彼女/彼は...で働いています」という言い方になります。
2 Entschuldigung, sprechen Sie Deutsch? 	
すみません // 話す / あなたは / ドイツ語	
すみません、ドイツ語が話せますか？（すみません、あなたはドイツ語を話しますか？）	
語順：	疑問文の時には、„Sprechen Sie Deutsch?“ というように、主語が動詞の後に来ます。
応用：	ドイツ語では、相手に話しかける時には、 „Entschuldigung, ...“ 「すみませんが、...」という言い方を使います。 ドイツ語では、相手に「...語が話せますか」と尋ねる時には、 „Sprechen Sie ...?“ 「...語が話せますか」という言い方になります。

図9 ビデオ1の「説明」の「ポイント・応用・語順」部分

上の説明は、ビデオ1からのものである。扱われている文法事項は動詞の現在人称変化である。例文2では、例外的に意識「すみません、ドイツ語が話せますか」と逐語訳「すみません / 話す / あなたは / ドイツ語」のほかに、直訳「すみません、あなたはドイツ語を話しますか」も付いている。

以下の説明は、ビデオ3からのもので、扱われている文法事項は不定冠詞と人称代名詞である。この課では、形容詞の格変化（3.2を参照）はまだ導入されていないが、筆者の教育経験からすると不定冠詞と同時に、1格（主語の格）の形容詞の語尾を導入することで、よい学習成果をもたらす。

1 Hanako kommt aus Fukuoka, aber sie wohnt und arbeitet jetzt in Frankfurt. 	
ハナコは / 来る / ...の中から / 福岡 // しかし / 彼女は / 住む / そして / 働く / 今 / ...の中で / フランクフルト	
ハナコは福岡出身ですが、今はフランクフルトに住み、そこで働いています。	
ポイント：	動詞は主語に応じて変化します。 kommt = 動詞 kommen の 3 人称単数現在形。 主語が、er/sie/es または単数の名詞の時には、動詞の語尾 -en が t に変わります。 wohnt = 動詞 wohnen の 3 人称単数現在形。 arbeitet = 動詞 arbeiten の 3 人称単数現在形。 動詞の語幹が、arbeit- のように t で終わる場合、動詞の語尾が -et になります。
応用：	ドイツ語では、人の出身地を紹介する時には、 „Sie/Er kommt aus ...“ 「彼女/彼は...の出身です」という言い方を使います。 人の住んでいるところまたは仕事場を紹介する時には、 „Sie/Er wohnt in ...“ 「彼女/彼は...に住んでいます」または „Sie/Er arbeitet in ...“ 「彼女/彼は...で働いています」という言い方になります。
2 Entschuldigung, sprechen Sie Deutsch? 	
すみません // 話す / あなたは / ドイツ語	
すみません、ドイツ語が話せますか？（すみません、あなたはドイツ語を話しますか？）	
語順：	疑問文の時には、„Sprechen Sie Deutsch?“ というように、主語が動詞の後に来ます。
応用：	ドイツ語では、相手に話しかける時には、 „Entschuldigung, ...“ 「すみませんが、...」という言い方を使います。 ドイツ語では、相手に「...語が話せますか」と尋ねる時には、 „Sprechen Sie ...?“ 「...語が話せますか」という言い方になります。

図 10 ビデオ 3 の「説明」

応用練習へは、すでに説明した左端のサイドメニューをクリックすることでアクセスできる。応用練習では、各課のスキットの内容に関する 10 の問題（3 択問題）がある。それぞれの問題について音声再生ボタンをクリックすると、3 つの選択肢が（正答、誤答に関係なく）全て読み上げられる。「正解を表示」ボタンをクリックすると、正しい答えが紫色でハイライトされる。以下の図 11 は、第 1 課の応用練習である。

8 ドイツ語では、「...語が話せますか」と尋ねる時には、どの言い方を使いますか。		
Kommen Sie aus ...?		☐
Sprechen Sie ...?		
Wohnen Sie in ...?		
9 ドイツ語では、「...の国の方ですか」と尋ねる時には、どの言い方を使いますか。		
Sind Sie aus ...?		☐
Arbeiten Sie in ...?		
Wohnen Sie in ...?		
10 ドイツ語では、「私は...出身です」と言う時には、どの言い方を使いますか。		
Ich arbeite in ...		☐
Ich wohne in ...		
Ich komme aus ...		
正解を表示 正解を非表示		

図 11 ビデオ 1 の「応用練習」

3.2 ビデオスキットの台詞

台詞には、和訳および文法に関する日本語による説明が付いているので、台詞の内容は、文法や語彙の難易度にあまりこだわらず、内容を基準にして選択した。スキットはほとんど全てナレーションの部分も入った対話形式である。ビデオスキットの各課のタイトルは『CALL ドイツ語』のトップページ（図 1）に記載されている。各課のタイトルを紹介したい。

ビデオ 1	初対面	ビデオ 9	ジョギング
ビデオ 2	会社で	ビデオ 10	ハンドボール
ビデオ 3	知り合い同士の会話	ビデオ 11	教授と学生
ビデオ 4	学生同士の会話	ビデオ 12	ペンギン
ビデオ 5	ヒッチハイク	ビデオ 13	戦争
ビデオ 6	レストランで	ビデオ 14	刑事物
ビデオ 7	部屋探し	ビデオ 15	先生の悩み
ビデオ 8	電話	ビデオ 16	込み入った話

このように、「初対面」や「レストランで」のような従来の初級者向けの教材でよく扱われるテーマだけでなく、「戦争」といったテーマも扱われている。

次に、ビデオ 3 の台詞を紹介する。

	Herr Klein und Herr Groß gehen in den Zoo.	クラインさんとグロースさんは動物園に行きます。
A	Ich habe Durst. Trinken wir doch etwas! Dort ist ein kleines Café. Es ist schön, nicht?	僕、喉が渇いています。何か飲みませんか。 あそこに、小さな喫茶店があります。よさそうですね。
B	Na ja, ich weiß nicht.	まあ、どうかな。
A	Möchten Sie denn nichts trinken?	あなたは何も飲みたくないですか？
B	Doch, ich habe auch Durst. Aber das Café ist zu teuer.	いいえ、僕も喉が渇いています。 でも、その喫茶店は高すぎます。
A	Gut, dort ist eine kleine Kneipe. Sie ist sehr billig.	わかりました。あそこに小さな飲み屋があります。とても安いですよ。
B	Ja, gehen wir in die Kneipe!	じゃあ、その飲み屋に行きましょう。

この課で扱われている文法事項は不定冠詞と人称代名詞であるが、3.1 で説明したように、1 格の不定冠詞を導入する際、1 格の形容詞の格変化も導入される。まず、「形容詞の格変化」という概念を簡単に説明したい。ドイツ語では、名詞を修飾する形容詞は、その名詞の性や格によって語尾の形が変わる。ドイツ語では、名詞には文法上の性があり、男性・女性・中性名詞に分かれている。名詞の性別を判断できる完全な規則はないので、従来のドイツ語の授業では名詞の性を導入した時に、学習者に名詞を覚える時にはその名詞の性も一緒に覚えるように指導していたが、筆者は自分の学生に、名詞を文脈で覚えればその性も自然に覚えられる、と指導している。なぜなら文脈で名詞の性がわかることもあるからだ。

例文 „Dort ist ein kleines Café. Es ist schön.“ 「あそこに、小さな喫茶店がある。よさそうですね。」を使って上に述べたことを説明したい。例文の dort は「そこ、あそこ」を意味する副詞で、ist は英語の is にあたる動詞、ein は中性 1 格の不定冠詞、klein は「小さい」を意味する形容詞、Café は「喫茶店」という中性名詞である。es は英語の it にあたる人称代名詞で、schön は「きれい」を意味する形容詞である。ここでは、文脈に合わせて「よさそう」と和訳されている。

この例文を使って、中性 1 格の人称代名詞は es であり、1 格の不定冠詞＋形容詞＋中性名詞の場合、その形容詞 (klein) に付ける語尾 -es は、人称代名詞 es と同形であることが指摘できる。また、中性 1 格の定冠詞 das の語尾 -as も -es と似ていることが分かる。言い換えると、das と es のおかげで、

Café が中性名詞であることも理解できるようになる。

次に „Dort ist eine kleine Kneipe. Sie ist sehr billig.“ 「あそこに、小さな飲み屋がある。とても安いですね。」と „Gehen wir in die Kneipe.“ 「その飲み屋に行きましょう。」という例文を説明する。この文の eine は女性 1 格の不定冠詞、Kneipe は「飲み屋」を意味する女性名詞、sie は英語の she にあたる人称代名詞、sehr は「とても」を意味する副詞、billig は「安い」という形容詞、gehen は英語の go にあたる動詞、wir は英語の we に対応する人称代名詞、in は英語の in や into または to にあたる前置詞である。

これらの例文によって、女性 1 格の不定冠詞は eine であり、その語尾 -e と 1 格の不定冠詞 + 形容詞 + 女性名詞の場合、その形容詞 (klein) に付ける語尾 -e と不定冠詞 eine の語尾 -e および、女性 1 格の定冠詞 die の最後の文字 -e が同形であることが分かる。言い換えると、die と sie と eine のおかげで、Kneipe が女性名詞であることも理解できるようになる。

さらに、ビデオ 1 で学習した男性名詞 Kaffee 「コーヒー」を使って „ein kleiner Kaffee“ – „er“ – „der Kaffee“ を示すことによって、男性 1 格の人称代名詞は、英語の he を意味する er であり、1 格の不定冠詞 + 形容詞 + 男性名詞の場合、その形容詞に付ける語尾 -er は、人称代名詞 er と同形であり、また男性 1 格の定冠詞 der の語尾 -er も同形であることが指摘できる。1 格の男性名詞と中性名詞の不定冠詞は同じ形であることも指摘できる。

以上のことによって、ドイツ語は変化が多い言語ではあるものの、その変化には共通点があることを学習者に説明できる。このような説明を通して学習者のドイツ語に対する不安を和らげることができる。また、ドイツ語では名詞の代わりに人称代名詞を使う時には、人だけでなく、物に対しても女性名詞の場合は英語の she にあたる sie、男性名詞の場合は英語の he にあたる er を使うことも指摘できる。

この課では、„Ich weiß nicht.“ や „Möchten Sie denn nichts trinken?“ などのように、まだ未習の文法事項 (wissen の現在人称変化と助動詞) が出てくるが、これについては「説明」の「応用」の部分で簡単に説明されている。„Ich weiß nicht.“ や „Möchten Sie denn nichts trinken?“ という表現のおかげで、この会話はドイツ語として自然なものになっている。

次は、「戦争」をテーマとするビデオ 13 を紹介したい。

A B	Als der Krieg aus war, kam der Soldat nach Hause. Aber er hatte kein Brot. Da sah er einen. Der hatte Brot. Den schlug er tot. „Du darfst doch keinen totschiessen“, sagte der Richter. „Warum nicht?“ fragte der Soldat.	戦争が終わって、 兵士が帰ってきた。 でも、その兵士にはパンがなかった。 その時、彼は一人の男を見かけた。 その男はパンを持っていた。 その男を兵士は殴り殺した。 「人を殴り殺すのは許されないことです。」 と裁判官が言いました。 「どうしていけないのですか？」 と兵士が尋ねました。
----------------------------	--	--

このビデオの台詞は戦争を批判する Wolfgang Borchert の作品 *Lesebuchgeschichten* (Borchert 1956) からの引用である。文学作品によって、日常生活を超える話題を扱うことができるので、初級者向けの語学授業でも文学作品を教材とすることには意義がある。

内容が意味深いものであることはいうまでもなく、語学授業では、「従属接続詞」や「過去形」を導入するために使えるテキストでもある。ドイツ語では、英語とは違って、過去形は、話し言葉としてはほとんど使わないが、物語の書き言葉として使用される。英語と同様に、ドイツ語の動詞は「規則変化動詞」と「不規則変化動詞」の2つのグループに分かれる。規則変化動詞の過去形は、sagte「言った」や fragte「尋ねた」のように、動詞の語幹に語尾 -te を付けて作る。日常的によく使う英語の had (have の過去形) にあたる動詞 hatte「持っていた」もこのグループに属するが、hatte の現在形は haben で、その語幹は hab である。haben には日本語でいう「音便」のような現象があるといえる。日常的によく使う動詞には不規則変化するものが多く、例えば、英語の was にあたる war「だった」、came にあたる kam「来た」と saw にあたる sah「見た」などである。これらの動詞は暗記するしかない。

次に「従属接続詞」について簡単に説明したい。ドイツ語では、従属接続詞は文の語順に影響を与える接続詞である。例文 „Als der Krieg aus war, kam der Soldat nach Hause.“ 「戦争が終わって、兵士が帰ってきた。」を使って、この現象を説明する。この文の als は「～した時に」を意味する従属接続詞、der は男性1格の定冠詞、Krieg は「戦争」という男性名詞、aus は「終わった」を意味する副詞、Soldat は「兵士」という男性名詞、nach は方向を表す前置詞、Hause は名詞 Haus「家」の3格である。3格の説明はここでは省くが、nach Hause は「家・国に帰る」を意味する表現である。

ドイツ語では、動詞は主語に応じて変化し（図9参照）、その変化を「人称変化」と呼ぶ。人称変化した動詞はふつう文の第2位に置かれる。ところが上に挙げた例文では、動詞 war は前半の文の文末に置かれている。その理由は、als は「従属の接続詞」であり、従属の接続詞に導かれた文、つまり「副文」では、人称変化した動詞は、文末に来るからである。後半の文では、動詞 kam は、コンマの直後に置かれている。副文が主文の前に来たら、人称変化した動詞は、主文の先頭に来るからである。

最後に、ビデオ 16 を紹介したい。

A	Mama, darf ich mit Peter in den Ferien wegfahren?	お母さん、休みにペーターと旅行に出掛けてもいい？
B	Nein, das kann ich nicht erlauben. Du bist erst sechzehn Jahre alt.	だめ、そういうことは認められないわ。あなたはまだ16でしょ。
A	Aber Peters Schwester ist auch erst sechzehn, und die darf mit ihrem Freund wegfahren.	でも、ペーターの妹さんもまだ16なのに、彼女はボーイフレンドと旅行に出掛けてもいいんだって。
B	Ich kann mir nicht vorstellen, dass ihre Eltern das erlauben. Wo wollt ihr überhaupt schlafen? In der Jugendherberge?	信じられないわ、ご両親がそれを許すなんて。 あんたたち、そもそもどこで泊まるつもり？ ユースで？
A	Nein, wir zelten. Das ist am billigsten.	ううん、キャンピングするのよ。それが一番安いから。
B	Mein Gott! Wenn Papa das hört, fällt er in Ohnmacht. Nein, ich hätte Angst, dir so etwas zu erlauben.	やれやれ。こういうことがお父さんの耳に入ったら、気絶するわよ。 だめよ。私だったら、あなたにそういうことを許すなんて、とても心配だわ。
A	Was habe ich nur für Eltern?	なんという親なの？

このビデオの台詞は母親と娘の会話で、ボーイフレンドとの旅行の計画がテーマである。デリケートな内容ではあるものの、日本人学習者にとっても興味深いものと思われる。語学の授業では、「接続法」や「zu 不定詞」の導入にも、また話法の助動詞の復習にも使用できるテキストである。

例文 „Ich hätte Angst, dir so etwas zu erlauben.“ 「私だったら、あなたにそういうことを許すなんて、とても心配だわ。」を使い、上に述べた「接続法」と「zu 不定詞」という概念を説明しよう。この文の ich は英語の I にあたる人称代名詞、Angst は「不安」という女性名詞、so は「そういう」を意味する副詞で、etwas は「何か」という代名詞、zu は「すること」を意味する副詞、erlauben は「許す」という動詞である。

hätte は、動詞 haben の ich に対する接続法 2 式である。この話法の一つの用法は仮定を表すことである。従って、„Ich hätte Angst, dir so etwas zu erlauben.“ を直訳すると、「君にそういうことを許すと仮定すれば、私はとても心配です」となる。例文の zu erlauben 「許すこと」を「zu 不定詞」と言い、それを含む „dir so etwas zu erlauben“ 「君にそういうことを許すこと」を「zu 不定詞句」と言う。「zu 不定詞」は必ず「zu 不定詞句」の最後に置かれる。この文の「zu 不定詞句」„dir so etwas zu erlauben“ は、„Ich hätte Angst“ の目的語である。

4. 『CALL ドイツ語』を取り入れた授業について

次は、『CALL ドイツ語』を取り入れた授業について報告したい。筆者は、2007 年度～2009 年度まで『CALL ドイツ語』を自分の一年生向け、週 2 回担当したドイツ語 I・II の授業で使用した。なお、担当したクラスの学生の所属学部はさまざまであり、学生は担当教員を自主的に選ぶことはできず、機械的に各クラスに割り振られる。そのために、筆者のクラスの学生は、偶然このクラスに来た学生である。

『CALL ドイツ語』を授業に取り入れる前に、筆者は Dodsén (1967; ドッドソン 1983) と Butzkamm (1980; 1993) が考案・提唱した「バイリンガル教授法」を研究し、自分のドイツ語授業で応用すること (Kasjan 1995; 1996; 1997; 2004) にしたが、『CALL ドイツ語』を取り入れた授業でも、筆者は「バイリンガル教授法」の応用を続けているので、その教授法について述べたい。

日本人学生向けのドイツ語授業におけるバイリンガル教授法は、日本語を計画的に利用する一方、ドイツ語をコミュニケーションの道具にすることによって、学生にドイツ語を応用させるものである。そのために、学生に対話文、説明文、詩などのようなテキストをきちんと暗記させ、ロールプレイをさせる。次に、暗記させた文の表現から基本的な文法事項に関して、さまざまな練習を行なう。最後に、学生が特定のテーマについてドイツ語の台詞を作り、それをロールプレイの形にする。

そのために、筆者は『CALL ドイツ語』のビデオスキットの台詞を考案した際、暗記しやすくロールプレイのために利用しやすい物の作成を目指した。次は、ビデオスキットの授業での応用について述べたい。

4.1 授業における学習段階

ビデオスキットを用いた作業は次の 2 つの主要段階に分かれている。

1) 導入段階：

筆者は新しい台詞の意味と発音を導入し練習した上、台詞の内容を学生に身に付けさせる。最後に、学生がその台詞でロールプレイをする。

2) 展開段階：

学生がすでに学習したドイツ語の単語とパターンなどを用い、台詞の表現を部分的に入れ替

え拡大・変形させる。

一方、従来のバイリンガル教授法では、テキストを用いた作業には、もう一つの主要段階がある。

3) 運用段階：

学生が自分で新しい台詞を創って、それでロールプレイをする。

以前、筆者はその作業も授業で用いたが、文法の説明と練習を増やすために、運用段階の代わりに、『CALL ドイツ語』の文法部分を使用することにした。しかし、本稿では文法部分の授業への応用については論じない。

4. 1. 1 導入段階

ビデオスキットの台詞をドイツ語流のイントネーションで、また内容に合わせた身振りで皆の前でロールプレイすることがこの段階の目的である。この目的を達成するために、同じ台詞を何回も練習しなければならない。ロールプレイの導入から演じるまで、3時間の授業が必要である。

4. 1. 1. 1 一時間目

新しい台詞を練習する前に、筆者は、該当スキットの「説明」をプリントし、学生に配る。そして、該当の「説明」をプロジェクターで教室の前にあるスクリーンに投影する。次は、台詞の表現を一つ一つ言ってみせ、それから表現を日本語に直してから、もう一度言ってみせる。学生が筆者に従ってドイツ語の表現を発音する。その際、次の点は重要である。

- 1) 台詞のプリントは配られており、台詞の内容はスクリーンに投影されているものの、筆者はドイツ語の新しい表現を初めて発音してみせる時には、筆者の口元に注目し、プリントやスクリーンをなるべく見ないように学生に指示する。また、学生がドイツ語の表現を発音する時にも、文字をなるべく見ないように学生に指示する。ただし、発音しようとする学生がドイツ語表現の内容を途中で忘れてしまった時には、プリントやスクリーンを見てもいいと学生に指示する。
この方法では、筆者の発音の方が重要な刺激になり、プリントや投影された文字は、筆者の発音を補強する役割を果たす。すでに英語をある程度まで学習した日本人学生は、英語と同じローマ字を使用するドイツ語を英語の立場から解釈し、ドイツ語を英語流に読む癖がある。それを避けるために、筆者は上に述べた方法を勧める。
- 2) 学生は筆者の刺激にすぐに反応する。学生が間違っただけで反応したら、あるいは反応が2秒送れたら、筆者が該当表現を繰り返す。反応が遅ければ遅いほど、正しいドイツ語の発音は覚えられなくなってしまう。
- 3) イントネーションとアクセントの間違いの方が、独立した音の発音の間違いよりも、誤解を招くので、イントネーションとアクセントの導入・練習が、独立した音の導入・練習に先行する。
- 4) 正しいドイツ語のイントネーションとアクセントにおいては完璧を目指す。正しいドイツ語のイントネーションと単語のアクセントを身に付けたら、文法をめぐる作業（例えば、分離動詞・非分離動詞の問題）もはるかに楽になる。

あるドイツ語表現の意味を説明する時に、3.2で説明したように、その表現をどんな場合に適用できるか、ということを学習者に習得させるには、その表現に当たる日本語の意識が不可欠である。しかし、その表現の構造を理解させるためには、更なる説明が必要になることもある。台詞の意味を徹底的に把握できるためには、スキットの「説明」部分は大きな役割を果たす。

これまでの作業は学生全員と筆者がいっしょに行ったが、次の作業は学生がコンピューターを使い自主的に行う。そのために、筆者は、フラッシュ・ムービーを見ながら、台詞の表現を一つ一つ聴き、一時停止して大きな声で繰り返すように学生に提案するが、練習方法は学生に任せる。学生が自主的にコンピューターで練習している時には、筆者が教室を回りながら、学生に指示・助言を与え、学生の質問に答える。

4.1.1.2 二時間目

授業のはじめには小テストを実施する。そのために、筆者は前回習った台詞の中に出てきた表現をドイツ語で言い、学生はその和訳をテスト用紙に書く。

その後、プリントやコンピューターを見ずに一時間目での作業を繰り返すが、意味の説明は必要なだけにする。次に、学生が自主的に台詞を繰り返し、暗記する。そのために、筆者は学生に「Step3 練習する」と「Step4 確認する」を使用するように勧めるが、練習方法は学生に任せる。最後に、筆者は学生に当該ビデオスキットの応用練習を行うように指示する。前回と同様に、学生が自主的にコンピューターで練習している時には、筆者が教室を回りながら、学生に指示・助言を与え、学生の質問に答える。

4.1.1.3 三時間目

授業のはじめには小テストを実施する。そのために、筆者は前回習った台詞の中に出てきた表現を日本語で言い、学生はそのドイツ語訳をテスト用紙に書く。その際、学生が翻訳することを避け、ドイツ語を自発的に書かせるように、日本語によるメモは禁止されている。

その後、筆者は、学生を二人または三人のグループに分けて、グループでロールプレイを10分ぐらい練習するように指示する。役の選択は学生に任せておく。時間になったら、筆者は学生にプリントをしまい、『CALL ドイツ語』の画面をシャットダウンするように指示する。そして、学生にグループで皆の前でロールプレイしてもらう。

ロールプレイはこれまでの作業のゲネプロである。ロールプレイの際に、ドイツ語の表現をドイツ語流のイントネーションとスピードで表現できない人は、その表現をどんな場合でも会話の道具として使うことができない (Butzkamm 1980, 67)。

ロールプレイの直後に、展開段階に入る。

4.1.2 展開段階

この段階では、学生がすでに習った単語やパターンを用い、導入段階で習った表現を部分的に入れ替え、発展させる練習をする。練習する時には、筆者は最初に使うドイツ語表現を板書する。その練習は口頭で行われ、学生は筆者の日本語による表現をドイツ語に翻訳する。この練習は、学生が考えずに正しく反応できるまで、続けなければならない一方、以下のような練習は早く終わることが大切である。学生の集中が緩んだら、授業のプログラムを変え、別の練習などに切り替えない。

以下の練習は、ビデオ3のロールプレイの後に行う。練習する文法事項は1格名詞の定冠詞および述語形容詞と副詞の語順である。使用される語彙は、ビデオ1からビデオ3までに学習したものである。

文の部分的な入替 文の拡大

(定冠詞 + 名詞 + ist + 形容詞)

- | | |
|---|---|
| 教師： その喫茶店は高い。 | 教師： その喫茶店は高い。 |
| 学生 ₁ ： Das Café ist teuer. | 学生 ₁ ： Das Café ist teuer. |
| 教師： その喫茶店は安い。 | 教師： その喫茶店はとても高い。 |
| 学生 ₂ ： Das Café ist billig. | 学生 ₂ ： Das Café ist sehr teuer. |
| 教師： その飲み屋は安い。 | 教師： その喫茶店も高い。 |
| 学生 ₃ ： Die Kneipe ist billig. | 学生 ₃ ： Das Café ist auch teuer. |
| 教師： その飲み屋は小さい。 | 教師： その喫茶店もとても高い。 |
| 学生 ₄ ： Die Kneipe ist klein. | 学生 ₄ ： Das Café ist auch sehr teuer. |
| 教師： その飲み屋はよさそうです。 | 教師： その喫茶店は少し高い。 |
| 学生 ₅ ： Die Kneipe ist schön. | 学生 ₅ ： Das Café ist etwas teuer. |
| 教師： その動物園はよさそうです。 | 教師： その喫茶店は高くない。 |
| 学生 ₆ ： Der Zoo ist schön. | 学生 ₆ ： Das Café ist nicht teuer. |
| 教師： その社員食堂はよさそうです。 | 教師： その喫茶店はそんなに高くない。 |
| 学生 ₇ ： Die Kantine ist schön. [など] | 学生 ₇ ： Das Café ist nicht so teuer. [など] |

このような練習は単なるドイツ語の構造を練習するためではなく、ドイツ語によるコミュニケーションという目的のための手段である。新しいテキストを導入するに際して、以上のように創りうる表現の数は増えていく。一方、このような練習は文法の作業でもある。なぜなら、口頭で速く、正しく外国語へ翻訳できる人は、そのための必要な文法も身に付けたと考えられるからである。

以下の練習は、ビデオ 7 のロールプレイの後に行う。練習する文法事項は 4 格名詞と 3 格の目的語および助動詞、動詞と副詞の語順である。使用される語彙は、ビデオ 1 からビデオ 7 までに学習したものである。

文の部分的な入替

(主語 + 話法の助動詞 + 4 格目的語の名詞 + 副詞 + 3 格目的語の名詞 + 動詞)

- | |
|--|
| 教師： 私はそのアパートをまず主人に見せてからでないと。 |
| 学生 ₁ ： Ich muss die Wohnung zuerst meinem Mann zeigen. |
| 教師： 私はそのアパートをまず妻に見せてからでないと。 |
| 学生 ₂ ： Ich muss die Wohnung zuerst meiner Frau zeigen. |
| 教師： 私はその車をまず妻に見せてからでないと。 |
| 学生 ₃ ： Ich muss das Auto zuerst meiner Frau zeigen. |
| 教師： 私はその車をまず妻にあげてからでないと。 |
| 学生 ₄ ： Ich muss das Auto zuerst meiner Frau geben. |
| 教師： 私はそのワインをまず妻にあげてからでないと。 |
| 学生 ₅ ： Ich muss den Wein zuerst meiner Frau geben. |
| 教師： 私はそのワインをまず彼の奥さんにあげてからでないと。 |
| 学生 ₆ ： Ich muss den Wein zuerst seiner Frau geben. [など] |

学生は、今回学習したパターンを復習しなければならない。次の授業のはじめには小テストを実施する。そのために、筆者は前回の授業で学習したパターンとこれまで学習した語彙を使い、ある

表現を日本語で言い、学生はそれをドイツ語に直す。その際、学生が翻訳することを避け、ドイツ語を自発的に書かせるように、日本語によるメモは禁止されている。

4.2 授業を振り返って

授業の目標は、ビデオスキットで学習した語彙、パターンや文法事項を使用し、ドイツ語を創造的かつ正確に使えるようにすることであった。2008年度前期に担当したドイツ語授業（ドイツ語Ⅰ）で実施した前期期末試験の形式と結果を紹介する。学生は前期で26コマのドイツ語授業を受けた。試験の範囲はビデオスキット1～8までに学習した語彙と文法事項である。学生は90分の時間内に、まずドイツ語の文章を10問聞いて和訳し、日本語の文章を20問メモとらずに聞いて独訳しなければならない。独訳する文章は授業では学習しなかったもので、試験においては文法に関するヒント（名詞の性など）は一切与えられない。次にドイツ語による10問の質問にドイツ語で答えを書く。最後に60語の長さの独作文を1編書く。その作文のテーマも授業では学習しなかったものである。

和訳、独訳とドイツ語で答える文は一問10点である。独訳では綴りの誤り、書き落とした副詞、副詞の誤った語順は1点減点、誤った冠詞や動詞、形容詞、冠詞などの誤った語尾、動詞の誤った語順は2点減点する。書き落とした重要な単語は2点または3点減点する。和訳では、意味が通じない場合、文を誤訳した場合は10点減点するが、一部だけ誤訳した場合は2点または3点減点する。ドイツ語で答える文では、答えの内容のみを採点の対象にする。ドイツ語が通じる場合、綴りや文法の誤りは減点しない。作文は100点満点であるが、4つの観点を平等に（25点ずつ）考慮する。それらは、①テーマに対する内容の即応性、②文の構造、③使用した語彙のバラエティーおよび④綴りや文法の正しさである。

従って満点は500点で、それを5で割って最終的な点数とする。採点は厳しく行っている。一つのクラスでは、受験者41人中、90点以上は5人、80点～89点は12人、70点～79点は12人、60点～69点を人は9人で、59点以下は3人であった。もう一つのクラスでは、受験者は40人中、90点以上は2人、80点～89点は9人、70点～79点は18人、60点～69点を人は6人で、59点以下は5人であった。

半年のドイツ語授業で学習したビデオスキットにおける語彙は、250語ぐらいである。文法事項は、動詞の現在人称変化、主文の語順、疑問文の作り方、名詞の性、格と複数形、定冠詞・不定冠詞の1格、3格、4格、否定、所有冠詞の1格、3格、4格、前置詞 aus, mit, für, in, nach、分離動詞・非分離動詞、命令文、数詞と1格と4格の形容詞変化であった。授業の目的は、学生が学習した語彙と文法事項を使用し、自ら新しいドイツ語の表現を創れるようになることだった。期末試験の結果を見る限り、その目的を部分的に達成できたとは言えるが、不合格者の数は多い。

5. おわりに

本稿は、ドイツ語教材『CALL ドイツ語』のビデオスキットを紹介する一方で、『CALL ドイツ語』のビデオスキットを利用した授業について報告したものである。『CALL ドイツ語』を取り入れた授業の前期期末試験の結果を見る限り、授業はそれなりの成果をもたらしたと言えるであろう。しかしその一方で、不合格者が多く、勉強の負担の重さや教授法に関する学生からの苦情も多かった。教授法に関する苦情とは、文法事項が導入される前に学生がプレイの台詞を覚えなければならないことであった。そこに、筆者もそこに『CALL ドイツ語』を主な教材として利用した授業の短所を感じた。それに加えて、CALL教室を使用した際、学生はコンピューター・モニターの後ろ側に隠れているので、会話が妨げられるという短所があった。

そのため、筆者は2010年度以降、CALL教室の使用を辞めることにし、文法中心の語学授業に発

音や会話練習を取り入れることにした。しかし、将来的には『CALL ドイツ語』や他のウェブ教材を主な授業教材として使用する可能性もある。現在は、『CALL ドイツ語』を学生に紹介し、その教材を補助教材として授業で使っている。

参 考 文 献

- 阿部吉雄, 岡野進, カスヤン・アンドレアス, 杉浦謙介 2006. CALL 教材『CALL ドイツ語』丸善.
- Borchert, W. 1956. *Lesebuchgeschichten*. Hamburg: Rowohlt.
- Butzkamm, W. 1980. *Praxis und Theorie der bilingualen Methode*. Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Butzkamm, W. 1993. *Psycholinguistik des Fremdsprachenunterrichtes*. Tübingen: Francke.
- Butzkamm, W. 1995. „Unterrichtsmethodische Problembereiche.“ *Handbuch Fremdsprachenunterricht*. Hg. Karl-Richard Bausch et al. 3. Auflage. Tübingen: Francke. S. 188-194.
- Dodson, C.J. 1967. *Language Teaching and the Bilingual Method*. London: Pitmann.
- ドッドソン, C.J. 1983. 『バイリンガル メソッド 付: 日本における実験と実践』 東京あぼろん社.
- Kasjan, A. 1995. „Die bilinguale Methode im Deutschunterricht für japanische Studenten I. Die Einführung in die Aussprache und das unterrichtliche Funktionsvokabular.“ *Dokufutsu Bungaku Kenkyu*, 45, 159-171.
- Kasjan, A. 1996. „Die bilinguale Methode im Deutschunterricht für japanische Studenten II. Die Einführung in die Textarbeit.“ *Gengobunka Ronkyu*, 7, 125-141.
- Kasjan, A. 1997. 「ドイツ語の入門期における『バイリンガル教授法』」『言語文化論究』 8, 1-21.
- Kasjan, A. 2004. 「多言語習得とその使用 – 二言語使用児のバイリンガル言語習得と外国語授業におけるバイリンガル教授法 –」『言語文化研究叢書 IX』 1-14.
- Kasjan, A. 2007. 「外国語 CU プロジェクトにおけるドイツ語教材 – ビデオスキット部分の開発について –」『ドイツ語情報処理研究』 第 18 号, ドイツ語処理研究会, pp.49-58.
- Krashen, S. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S./Terrell, T. 1985. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon Press.
- Wode, H. 1981. *Learning a second Language: An Integrated View of Language Acquisition*. Tübingen: Narr.
- Wode, H. 1988. *Einführung in die Psycholinguistik: Theorien, Methoden, Ergebnisse*. Ismaning: München.

Das WBT-Sprachlernsystem *CALL-Deutsch* im Deutschunterricht

Andreas Kasjan

In diesem Aufsatz wird der Videoteil des WBT-Sprachlernsystems *CALL-Deutsch* beschrieben und über die Verwendung dieses Lernsystems im Deutschunterricht berichtet. *CALL-Deutsch* besteht aus einem Grammatikteil von 18 Lektionen und einem Videoteil von 16 Einheiten. Der Videoteil dient zur Ausbildung kommunikativer Fertigkeiten wie Hören und Sprechen und besteht aus den drei Teilen „Video-Sketch“, „Erläuterungen“ und „Praktische Übungen“. Die Video-Sketches bestehen aus Dialogen von ca. 60-Wörtern Länge, die z.T. auch kurze Erzählteile enthalten. Jeder Sketch ist mit einer deutschsprachigen Audio- und einer deutsch-japanischen Textdatei versehen. Die Audiodatei enthält die Rollentexte und Erzählteile der Sketches, die Textdatei enthält darüber hinaus auch eine japanische Übersetzung der deutschen Rollentexte. Beim Abspielen der Video-Sketches wird die jeweilige gesprochene Äußerung in der Textdatei gelb markiert, so dass Ton und Text einander zugeordnet werden können. Jeder Sketch ist wiederum in die vier Sektionen „Hören“, „Verstehen“, „Üben“ und „Überprüfen“ unterteilt. In der Sektion „Hören“ sind weder der deutsche Text noch dessen japanische Übersetzung dargestellt, in der Sektion „Verstehen“ sind der deutsche Text und die japanische Übersetzung gegenüber gestellt, in der Sektion „Üben“ kann der Lerner eine Rolle aus dem Sketch auswählen und die andere stumm schalten, und in der Sektion „Überprüfen“ ist nur die japanische Textdatei dargestellt. Der Teil „Erläuterungen“ der Videoeinheiten enthält japanische Übersetzungen und japanischsprachige Erklärungen zum Satzbau, zur Grammatik und zur Anwendung der eingeführten deutschen Sprachmittel.

Im Unterricht wurden die Texte der Video-Sketches zunächst phonetisiert und semantisiert und gemeinsam und in Einzelarbeit mit dem Computer intensiv eingeübt, dann spielten die Lerner die Sketches zu zweit oder zu dritt auswendig vor der Klasse vor. Anschließend wurden die Satzmuster der Texte durch vielfältige bilinguale mündliche Übungen variiert. Dabei wurde auch das Vokabular bereits behandelter Texte wiederholt und in das sprachliche Repertoire der Lerner eingebunden.

In der schriftlichen Abschlussprüfung mussten deutsche Sätze, die vorgelesen wurden, ins Japanische und japanische ins Deutsche übersetzt werden. Außerdem mussten deutsche Fragen zum Inhalte der Sketches auf Deutsch beantwortet und ein kleiner Dialog auf Deutsch verfasst werden. Die Ergebnisse der schriftlichen Semesterabschlussprüfungen zeigten zwar einen guten Lernerfolg bei den meisten Studenten. Aber in jeder Prüfung fielen auch durchschnittlich 20% der Lerner durch die Prüfung. Außerdem klagten viele Studenten über den hohen Lerndruck und die Tatsache, dass die Grammatik erst nach der Einführung der Texte behandelt wurde. Ich bin daher in meinem Unterricht zu einer abgewandelten Form der Grammatik-Übersetzungs-Methode umgeschwenkt, benutze aber auch zahlreiche kommunikative Übungsformen.

